

# 助詞の撥音化現象：『日本語話し言葉コーパス』を用いた 音声転訛現象の分析

## The moraic-nasalization of particle /no/ in Japanese: A corpus-based analysis of language variation

小磯 花絵<sup>†</sup>  
Hanae Koiso<sup>†</sup>

間淵 洋子<sup>††,†</sup>  
Yoko Mabuchi<sup>††,†</sup>

前川 喜久雄<sup>†</sup>  
Kikuo Maekawa<sup>†</sup>

<sup>†</sup> 独立行政法人国立国語研究所

<sup>††</sup> 東京都立大学大学院

<sup>†</sup> The National Institute for Japanese Language

<sup>††</sup> Graduate School, Tokyo Metropolitan University

The effects of language-internal and language-external factors upon the moraic-nasalization of particle /no/ was analyzed using the Corpus of Spontaneous Japanese. Three obvious factors and one seemingly factor were found out. First, the rate of moraic-nasalization differed considerably depending on the type of particle. The rate was much more higher when the particle was a nominalization-particle than it was a case-particle. Second, moraic-nasalization was favored when the onset consonants of the following syllables shared the same point of articulation as that of the particle consonant, i.e. alveolar or post-alveolar. Third, speaking rate and speaking style had influence upon moraic-nasalization. Higher rate and/or more formal style tended to increase the moraic-nasalization. Lastly, there seemed to be the effect of sentence-internal position of the particle. The rate of moraic-nasalization was highest in the sentence-final position, intermediate in the clause-final position, and lowest in phrase-final position. The last tendency awaits further verification.

### 1 はじめに

日常の話し言葉では、「店屋敷」を「テンヤモン」と撥音化したり、また「出力」を「シツリョク」と直音化するなど、発音のバリエーションがきわめて多い。このような音声の転訛は、話者の属性や発話の場面といった社会的要因とも関連しており、聞き手に対する印象に影響を与えるものであるが、その詳細は十分には解明されていない。本研究では、このような音声転訛現象のうち、助詞「の」が「ン」と発音される撥音化に着目し、その言語内的・言語外的要因を探る。

分析には、国立国語研究所・通信総合研究所（現・情報通信研究機構）が構築した『日本語話し言葉コーパス』（*Corpus of Spontaneous Japanese*: CSJ）を利用する。小磯（2002）では、構築途中のCSJを利用し助詞「の」の撥音化に関する予備的研究を行なったが、作業中のデータであったということもあり、撥音化の判定精度に問題があった。また分析可能な言語内的・外的要因も限られており、十分な分析が行なえなかった。そこで本研究では、2004年に一般公開されたCSJを利用し、より詳細な分析を行なう。

### 2 対象データ

#### 2.1 CSJ

CSJは自発性の高いモノローグを中心に構成された話し言葉コーパスで、学会における口頭発表（以下「学会講演」）と、一般話者による主に個人的な内容に関するスピーチ（以下「模擬講演」）を主対象としている。CSJ全体は661時間の音声から構成されるが、本研究ではこのうち「コア」と呼ばれるデータ範囲の中からモノローグ音声39時間（177講演）を選び分析対象とした。

#### 2.2 撥音化の判定

コアデータには、人手作業を伴った精度の高いラベリング（形態論情報・分節音情報・韻律情報・節単位情報など）や、講演に対する印象評定データが含まれている（詳細は前川（2004）参照）。助詞「の」の撥音化の判定には、このうち分節音情報（音声を構成する子音母音等の情報とその時刻に関する情報から構成）を利用した。

助詞「の」のうち、以下の二つを分析から除外した<sup>1</sup>。

<sup>1</sup>分析によってはこれ以外にも対象外としたものがある。個別の対応については分析の節でその都度触れる。

表 1: 講演種別・話者性別毎にみた助詞「の」の頻度

	助詞「の」全体			格助詞「の」			準体助詞「の」		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計	男性	女性	合計
学会講演 (70 講演)	7645 (46 講演)	4857 (24 講演)	12502	5943	3761	9704	1702	1096	2798
模擬講演 (107 講演)	6198 (53 講演)	6263 (54 講演)	12461	3259	3204	6463	2939	3059	5998
合計	13843	11120	24963	9202	6965	16167	4641	4155	8796

1. 言い間違いなどのために助詞「の」が「ノ」「ン」以外で発音されている場合
2. 助詞「の」がメタ的に引用されている場合(例:「の」という助詞を分析したところ)

表 1 に分析対象とした格助詞・準体助詞の総数を講演種別・性別毎に示す。

### 3 分析

#### 3.1 言語内的要因

本節では、助詞「の」の撥音化に関わる要因として、前後の形態素やモーラといった言語内的要因を取り上げ分析を行なう。

##### 3.1.1 助詞の機能：格助詞と準体助詞

表 2 に格助詞・準体助詞毎の撥音化率を示す。格助詞「の」の撥音化率は 0.5% と極めて低いのに対し、準体助詞は 52.4% と半数以上が撥音化している。同じ助詞「の」であっても、機能によって撥音化の出現傾向に大きな違いがある。そこで今後の分析はいずれも格助詞と準体助詞に分けて行なう。

表 2: 格助詞・準体助詞毎の撥音化の頻度

	撥音化あり	撥音化なし	総数
格助詞	77 (0.5%)	16090 (99.5%)	16167
準体助詞	4613 (52.4%)	4183 (47.6%)	8796

##### 3.1.2 格助詞：後続の形態素・モーラ

撥音化された格助詞「の」の直後の形態素を以下に示す(直後がフィラーと言い淀みの場合を除く)。

あれ (1/8), 干 [ジュウ](1/36), 授業 (1/6), 高 [タカ](1/17), 為 (1/50)  
手 [テ](1/7), 典型 (1/3), テンプレート (1/4), 時 [トキ](7/129)  
ところ (11/155), 友達 (1/18), 抽出 (1/4), ない (1/24)  
中 [ナカ](27/389), 仲間 (1/8), 夏休み (1/3), 名前 (1/31)  
(括弧内右の数字は当該形態素が格助詞「の」に後続した頻度,  
左の数字はそのうち撥音化した格助詞「の」に後続した頻度)

冒頭に挙げた「あれ」を除き、いずれも歯茎音あるいは後部歯茎音で始まる語となっている。

そこで、格助詞「の」を、後続モーラが歯茎音(後部歯茎音を含む)かそれ以外の非歯茎音かで分類し、それぞ

れ講演毎に撥音化率を算出した上で両者に差がないかを対応のある t 検定を用いて調べたところ、後続モーラが歯茎音・後部歯茎音の場合の方が、非歯茎音の場合よりも有意に撥音化率が高いことが分かった ( $t(176)=-6.05$ ,  $p<.001$ : 表 3 参照)。助詞「の」も歯茎音であることから、格助詞「の」の撥音化は、同じあるいは類似した調音点である歯茎音・後部歯茎音が後続する際に生じやすい現象と考えることができる。

表 3: 後続・先行モーラが歯茎音・後部歯茎音と非歯茎音の場合の撥音化率

	後続モーラ		先行モーラ	
	歯茎音	非歯茎音	歯茎音	非歯茎音
格助詞	1.70%	0.06%	0.77%	0.54%
準体助詞	68.00%	0.31%	55.87%	31.44%

##### 3.1.3 準体助詞：後続の形態素・モーラ

撥音化された準体助詞「の」の直後の形態素を、歯茎音・後部歯茎音と、それ以外に分けて表 4 に示す(直後がフィラーと言い淀みの場合を除く)。助動詞「です」やその省略形(口語調)「す」、同じく助動詞「だ」やその融合形「じゃ」(「で(助動詞)」+「は(係助詞)」)が後続する場合に、極めて高い確率で撥音化していることが分かる。

これらはいずれも歯茎音・後部歯茎音であることから、歯茎音・後部歯茎音とそれ以外に分けて撥音化率を比較したところ、後続モーラが歯茎音・後部歯茎音の場合の方が、非歯茎音の場合よりも有意に撥音化率が高いことが分かった ( $t(176)=-30.5$ ,  $p<.001$ : 表 3 参照)。

この結果は、格助詞の場合と同様準体助詞に関しても、同じあるいは類似した調音点の連続という音韻環境が、撥音化に強く影響している可能性があることを意味する。特に準体助詞の場合、「あるんだ」や「見るんです」といったように、後続する表現も限定されていることから、格助詞の場合と比べて文法化の進んだ現象であることが示唆される。

表 4: 撥音化された準体助詞「の」の直後の形態素

	撥音化数	総数	撥音化率
[歯茎音・後部歯茎音で開始する形態素]			
助動詞「です」未然形「でしょ」	64	77	83.12%
助動詞「です」終止形「です」	3529	3606	97.86%
助動詞「です」終止形省略「す」	24	24	100.00%
助動詞「だ」未然形「だろ」	88	99	88.89%
助動詞「だ」連用形「だっ」	8	8	100.00%
助動詞「だ」連用形「で」	381	1489	25.59%
助動詞「だ」終止形「だ」	304	316	96.20%
助動詞「だ」仮定形「なら」	2	4	50.00%
助動詞「だ」連用形融合形「じゃ」	163	165	98.79%
格助詞「で」	1	12	8.33%
格助詞「と」	1	41	2.44%
形状詞「そんな」	1	1	100.00%
名詞「頼り甲斐」	1	1	100.00%
[非歯茎音で開始する形態素]			
終助詞「か」	3	312	0.96%
副助詞「か」	1	143	0.70%
副助詞「も」	1	124	0.81%
係助詞「は」	1	1021	0.10%
格助詞「が」	3	765	0.39%

### 3.1.4 格助詞・準体助詞：先行のモーラ

格助詞「の」の直前のモーラについても同様に分析を行なったが、有意差は見られなかった ( $t(176)=-1.2855$ ,  $p>.1$ : 表 3 参照).

準体助詞については、後続モーラと同様、先行モーラが歯茎音・後部歯茎音の場合に撥音化率が高いという傾向が見られた ( $t(176)=-30.5215$ ,  $p<.001$ : 表 3 参照). しかし、準体助詞「の」の撥音化の大半が助動詞「です」「だ」に先行する場合に出現するという強い偏りが存在するため、その影響を考慮する必要がある。そこで後続要素が助動詞「です」「だ」の場合に限定して同様の分析を行なったところ、有意差は見られなかった ( $t(176)=0.53$ ,  $p>.1$ . 歯茎音の場合の撥音化率: 0.686, 非歯茎音の場合: 0.676).

以上の結果から、格助詞、準体助詞ともに、先行要素が歯茎音であるか否かは撥音化の出現に影響を与えないことが示された。

## 3.2 言語外的要因

本節では、以下に挙げる言語外的要因に着目し、助詞「の」の撥音化との関係調べる。

- 講演の種別 (3.2.1 節)
- 発話速度 (3.2.2 節)
- 印象評定データ (3.2.3 節)

### 3.2.1 講演の種別

本節では学会講演と模擬講演とで撥音化率に違いがあるかを分析する。学会講演は、大勢の聞き手を対象に専門的な内容について発話する改まり度の高いスピー

表 5: 講演種別毎の撥音化率

	格助詞			準体助詞		
	N	Mean	SD	N	Mean	SD
学会講演	70	0.003	0.009	70	0.284	0.211
模擬講演	107	0.008	0.015	107	0.576	0.173

表 6: 転記基本単位毎の発話速度と撥音化率

	格助詞			準体助詞		
	N	Mean	SD	N	Mean	SD
1(速い)	4300	0.008	0.091	4208	0.574	0.494
2	5078	0.005	0.070	2747	0.509	0.500
3	4609	0.002	0.049	1466	0.443	0.497
4(遅い)	2180	0.002	0.048	375	0.395	0.489

チであるのに対し、模擬講演は、2~4名の聞き手<sup>2</sup>を対象に個人的な体験談等を語るといった改まり度の低いスピーチである。

講演毎に撥音化率を算出した上で、学会講演と模擬講演とで撥音化率に差があるかを  $t$  検定を用いて分析したところ、いずれの助詞に関しても、模擬講演の方が学会講演よりも有意に撥音化する傾向が見られた (格助詞:  $t(175)=2.393$ ,  $p<.05$ , 準体助詞:  $t(175)=10.034$ ,  $p<.001$ , 表 5 参照).

### 3.2.2 発話速度

本節では発話速度に着目し、撥音化率との関係を調べる。ここでは二つの方法で発話速度を算出した。一つは転記基本単位<sup>3</sup>毎に発話速度を算出する方法、もう一つは講演全体で発話速度を算出する方法である。前者は局所的な発話速度の違いを捉えることができるのに対し、後者は講演全体の発話速度を捉えることができる。

まず転記基本単位毎の分析について述べる。転記基本単位の継続時間とそれを構成するモーラ数から、1モーラあたりの発話継続長を算出し、単位毎の平均発話速度として利用した。これを各講演毎に四分位範囲により四つのクラスに分類し、クラス毎に助詞「の」の撥音化率に差があるかを一元配置分散分析を用いて検定した。その結果、格助詞・準体助詞ともに有意差が見られた (格助詞:  $F(3,16163)=6.72$ ,  $p<.001$ , 準体助詞:  $F(3,8792)=36.84$ ,  $p<.001$ , 表 6 参照). 全体的にみて、両助詞ともに、発話速度の速い方が撥音化率が高くなる傾向にあることが分かる (図 1).

次に、講演全体で発話速度を測定した場合の結果について述べる。一講演全体の発話継続時間(全転記基本単位の継続時間の和)を、全モーラ数で割ることで、1

<sup>2</sup> 模擬講演の聴衆は 20 代の収録スタッフが兼ねており、話者にとつては同年代あるいは年下にあたる。

<sup>3</sup> 転記テキストを構成する基本単位で、音声を原則 200 ミリ秒以上のポーズで区切った一まとまりの発話のこと (小磯 2004).

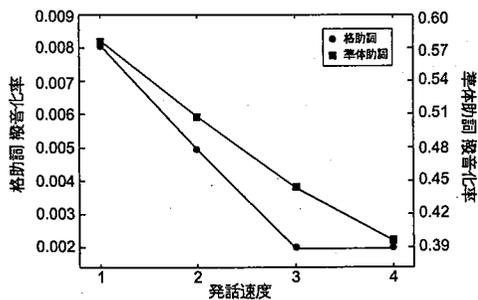


図 1: 転記基本単位毎の発話速度と撥音化率

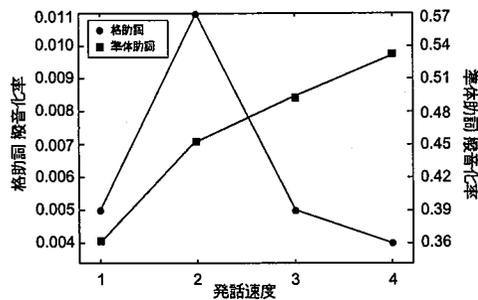


図 2: 講演全体の発話速度と撥音化率

モーラあたりの発話継続長を算出し、講演の平均的な発話速度として利用した。これを四分位範囲により四つのクラスに分類し、クラス毎に助詞「の」の撥音化率に差があるかを一元配置分散分析を用いて検定した。その結果、格助詞は有意傾向が、準体助詞は1%水準で有意差が見られた(格助詞:  $F(3,173)=2.65, p<.1$ , 準体助詞:  $F(3,173)=4.52, p<.01$ , 表7参照)。格助詞は特に傾向は見られないが、準体助詞に関しては、転記基本単位毎に算出した場合は反対に、発話速度の遅い方が撥音化率が高くなる傾向にあることが分かる(図2)。

表 7: 講演全体の発話速度と撥音化率

	格助詞			準体助詞		
	N	Mean	SD	N	Mean	SD
1(速い)	44	0.005	0.011	44	0.362	0.253
2	44	0.011	0.018	44	0.454	0.232
3	44	0.005	0.011	44	0.492	0.215
4(遅い)	45	0.004	0.010	45	0.533	0.216

このように、局所的な発話速度が講演全体の発話速度かで結果が全く逆になるが、この点については次節の分析も踏まえた上で考察を行なう。

### 3.2.3 印象評定データ

本節では、印象評定データを利用して分析を行なう。印象評定データとは、講演が聴き手にどのような印象を与えるかを記録したものである。印象評定データには単

表 8: 印象評定項目と撥音化率

評定値	格助詞			準体助詞		
	N	Mean	SD	N	Mean	SD
◆ あらたまったーくだけた						
7	5	0.002	0.002	5	0.238	0.157
6	474	0.004	0.010	474	0.326	0.240
5	1796	0.005	0.011	796	0.392	0.239
4	1494	0.006	0.013	494	0.441	0.231
3	1159	0.009	0.016	159	0.590	0.160
2	337	0.010	0.016	337	0.634	0.140
1	15	0.008	0.012	15	0.650	0.121
			$F(6,5273)=16.62, p<.001$			$F(6,5273)=171.96, p<.001$
◆ その場で考えて話しているー原稿を読み上げている						
7	293	0.009	0.016	293	0.587	0.180
6	1905	0.008	0.015	905	0.574	0.164
5	1212	0.007	0.015	212	0.514	0.196
4	200	0.005	0.011	200	0.396	0.222
3	659	0.004	0.010	659	0.336	0.218
2	707	0.003	0.007	707	0.250	0.224
1	304	0.002	0.006	304	0.195	0.209
			$F(6,5273)=27.67, p<.001$			$F(6,5273)=429.84, p<.001$
◆ スピード感のあるーゆったりとした						
7	102	0.004	0.010	102	0.287	0.234
6	468	0.005	0.011	468	0.386	0.232
5	1106	0.005	0.011	106	0.406	0.235
4	1459	0.006	0.012	459	0.428	0.240
3	1565	0.008	0.015	565	0.514	0.217
2	497	0.010	0.018	497	0.578	0.189
1	83	0.009	0.015	83	0.596	0.209
			$F(6,5273)=12.78, p<.001$			$F(6,5273)=75.51, p<.001$

独評定と集合評定の二種類が存在するが、本稿ではコアの独話に対してのみ付与された集合評定データを利用する<sup>4</sup>。集合評定データは、(1)心理尺度構成法に基づいて作成された講演音声評定尺度が用いられている、(2)男女比や年齢層が考慮された10名の評定者によって評定されている、という特色を有し、信頼性の高い評定値となっている。

本研究では、集合評定データのうち以下3つの評定語対による評定値(7段階)を利用した。評定者が左側の語に「非常にあてはまる」と答えた場合に7が、右側の語の場合に1が与えられている。

1. 改まったーくだけた(発話の改まりの程度)
2. その場で考えて話しているー原稿を読み上げている(発話の自発性)
3. スピード感のあるーゆったりとした(発話の速さ感)

講演毎に撥音化率を算出した上で、評定語対に対する評定値1~7毎に、撥音化率に差があるかを一元配置分散分析を用いて分析した<sup>5</sup>。結果をまとめて表8に示す。

<sup>4</sup>ただし、コアの独話177講演のうち1講演については評定値が存在しないため、本節の分析対象は176講演となる。

<sup>5</sup>各講演につき、10名の評定者が、冒頭、中盤、終盤の3個所の音声を聴取し、それぞれ評定を行なったため、1講演1評定語対につき30の評定値が存在する。分析ではこれらの評定値を独立に扱う。

この分析結果から、各評定項目に関して、両助詞ともに、(1) くだけた印象の講演である程、(2) 自発性の高い印象の講演である程、(3) ゆったりした印象の講演である程、それぞれ撥音化しやすい傾向にあることが指摘できる(図3参照)。

## 4 考察

### 4.1 言語内的要因

3.1 節の分析から、格助詞と準体助詞の「の」の撥音化は、「の」と同じあるいは類似した調音点である歯茎音・後部歯茎音が後続した場合に生じる現象であり、その意味において類似した現象であることが分かった。しかし、助詞「の」に歯茎音が後続する環境であっても、撥音化率は必ずしも同じではない。表3,4の結果をもとに撥音化率の観点から大きく以下の四つに分けることができる。

1. 撥音化率 80%以上：準体助詞「の」に助動詞「です」「だ」(連用形「で」と仮定形「なら」を除く)が後続する場合
2. 撥音化率 25~50%：準体助詞「の」に、助動詞「だ」の連用形「で」ないし仮定形「なら」が後続する場合
3. 撥音化率 1~10%：準体助詞「の」に格助詞「で」「と」が後続する場合、及び格助詞「の」に(後部)歯茎音で始まる語(主に名詞)が後続する場合
4. 撥音化率 1%未満：格助詞・準体助詞の「の」に非歯茎音で始まる語が後続する場合

まず、1と2の違いについて考えてみたい。準体助詞では、助動詞「です」「だ」が後続する場合は基本的にいずれも80%以上とかなり高い撥音化率を示しているにも関わらず、何故、同じ助動詞「だ」でありかつ歯茎音である連用形の「で」と仮定形の「なら」の場合のみ、それぞれ25%、50%と低い値となっているのだろうか。

連用形「で」と仮定形「なら」の文中での機能を、CSJのコアデータに付与されている節単位情報を用いて調べたところ、前者についてはその大半(1489例中1235例)が「ので」全体で接続助詞として機能し「理由節」を構成していることが<sup>6</sup>、後者は4例全てが「条件節」を構成していることが分かった(例：「放送も一切されなかったので期待は高まります」「そんなつらい思い

<sup>6</sup>CSJには「短単位」と「長単位」と呼ばれる二種類の形態論情報が付与されているが、本研究では前者の短単位情報を分析に利用した。前者は形態論単位をより短めに、後者は長めに分割するもので、「ので」に関しては、短単位では「の(準体助詞)」と「で(助動詞)」に分割されるのに対し、長単位では「ので(接続助詞)」を一単位と認定している。

してるんなら頼んであげる)」。一方、その他の「だ」の活用形や「です」は、基本的に文末のモダリティ成分となっている(例：「何回かお見舞いにも行ってるんだ」「何かおかしいんじゃない)」。つまり、文末のモダリティ成分をマークするか、それとも節をマークするか、という違いが見られるということである。

次に、1,2と3の違いを見てみよう。3には、格助詞の「の」に歯茎音・後部歯茎音の語(主に名詞)が後続する場合と(例：「奈良の大仏」)、準体助詞の「の」に格助詞「で」「と」が後続する場合(例：「最初のと同時に」「品番とかいうので色を付けたり)」の二種類があるが、いずれも格助詞が関係しており、文や節よりも小さな句を構成している。

以上の傾向をまとめると、「句<節<文(の末尾)」の順に助詞「の」の撥音化率が高くなる傾向にある、となる。特に文末におけるモダリティ成分は、文の構成から見た場合に付加的要素であり、この位置に発音のなまけとも解釈できる「の」の撥音化が出現しやすいというのは十分予想できることであろう。

ここで、類似した傾向を示す現象の一つ指摘しておきたい。「では」が「じゃ」と融合して発音される現象である。前川(2002)はCSJを対象に分析を行ない、「で」が格助詞の場合(「東京では>東京じゃ)と比べて助動詞の場合(そうではない>そうじゃない)の方がより融合しやすいことを指摘している(格助詞の融合率：1.7%、助動詞の融合率：42.6%)。助動詞「では」の大半は、「ない」が後続し文末のモダリティ成分を構成するのに対し、「で」が格助詞の場合はモダリティ成分とならない。この結果はまさに助詞「の」の撥音化に見られた傾向と一致する。

「句<節<文(の末尾)」の順にある種の音声変異現象が生じやすいという仮説は現在のところ全く想像の域にとどまるものである。今後、「の」の撥音化や「では」の融合に加え、様々な言語変異現象の分析を通して検討していく必要がある。

### 4.2 発話スタイル

3.2.1 節の分析で、格助詞・準体助詞ともに、学会講演よりも模擬講演の方がより撥音化しやすいことを、また3.2.3 節の分析で、改まった印象の講演よりくだけた印象の講演の方がより撥音化しやすいことを指摘した。3.2.1 節で触れたように、学会講演より模擬講演の方が平均的にみてくだけた雰囲気を持つスピーチである。つまりいずれの結果も、講演の改まり度の違いが助詞「の」の撥音化の出現に影響を与えていることを示唆するも

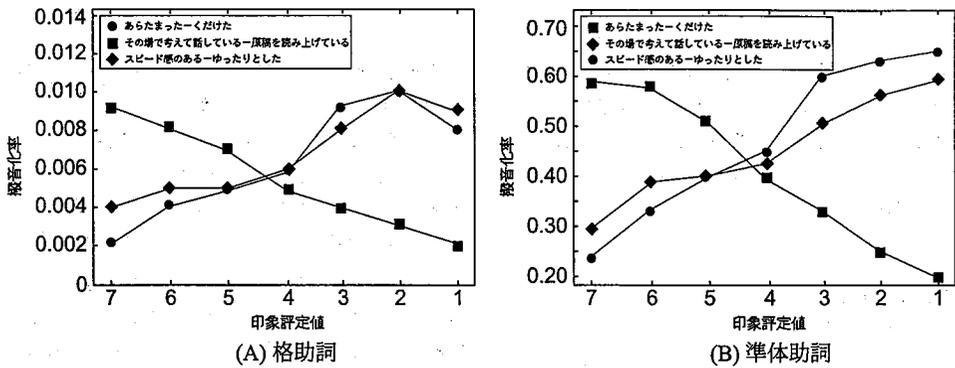


図3: 印象評定項目と撥音化率

のと言える。

準体助詞「の」の撥音化については、その大多数を占める「見るんだ」「見るんです」「見るんじゃない」などの言い回しが、改まり度の低い書き言葉でも生じることから、発話スタイルに応じて意識的に使い分けしている可能性もあるだろう。

#### 4.3 調音プランニング

3.1節の分析で、格助詞・準体助詞ともに、助詞「の」と同じあるいは類似した調音点である歯茎音・後部歯茎音が後続した時に撥音化しやすいことを指摘した。つまり助詞「の」の撥音化は、同じ調音点の連続という発音がしづらい環境での、一種の発音のなまけであると考えることができる。

3.2.3節の自発性に関する分析では、「原稿を読み上げている」という印象の講演より「その場で考えて話している」という印象の講演の方が、より撥音化しやすいという傾向が見られた。事前に原稿を準備しそれを読み上げる場合と比べ、自発的な発話では発話内容の産出により認知的負荷がかかり、その分、発音しづらい歯茎音の連続という環境において、調音運動のなまけである撥音化が特に出現したものと考えることができる。

#### 4.4 発話速度

3.2.2節において、(1)発話速度を局所的に算出した場合には発話速度が速い程撥音化率が高くなる傾向が見られたのに対し、(2)講演全体で発話速度を算出した場合、逆の傾向が見られた。本節ではこの一見矛盾する結果について考察する。

4.3節で述べた通り、助詞「の」の撥音化が、発音しづらい環境において生じる一種の発話のなまけと考えるならば、「の」やその前後の局所的な発話速度が速い程、撥音化率が生じやすいことが予想される。(1)の局所的に算出した場合の結果はまさにこの予測と一致する。

一方、講演全体で発話速度を測定した場合、当該の助詞「の」が速く発話されたか否かではなく、その話者が全体的に早口な話し方なのか否かということに近似していることになる。実際、3.2.3節の「発話の速さ感」に関する印象評定データの分析でも、ゆったりした印象の講演の方が撥音化しやすいという傾向が観察されており、整合的な結果となっている。

以上の結果は、助詞「の」の撥音化が、局所的には歯茎音の連続という調音レベルの問題と絡んで生じる現象であるのと同時に、大局的には話し方や発話スタイルなどにも関連した現象であることを示唆するものであり、本現象の二面性を表わしていると言えよう。

#### 5 おわりに

本稿では、CSJを利用して助詞「の」の撥音化に関わる言語内的要因、言語外的要因について検討した。その結果、助詞「の」の撥音化が、歯茎音の連続という音韻環境に起因した問題であると同時に、場面の改まりの程度などの発話スタイルとも関連した現象であることが示唆された。また、助詞「の」の撥音化や「では」の融合が文末のモダリティ成分においてより出現し易いという傾向を指摘した。この傾向がある程度一般性を有するかどうか、今後様々な言語変異現象の分析を通して明らかにしていきたい。

#### 参考文献

- 小磯花絵・土屋菜穂子・間淵洋子・斉藤美紀・籠宮隆之・菊池英明・前川喜久雄 (2001) 『『日本語話し言葉コーパス』における書き起こしの方法とその基準について』『日本語科学』, 9, 43-58.
- 小磯花絵・斉藤美紀・間淵洋子・前川喜久雄 (2002) 『話し言葉における助詞の撥音化現象の実態—『日本語話し言葉コーパス』を用いて—』『社会言語科学会第10回研究大会』, 215-220.
- 前川喜久雄 (2002) 『『日本語話し言葉コーパス』を用いた言語変異研究』『音声研究』, 6(3), 48-59.
- 前川喜久雄 (2004) 『『日本語話し言葉コーパス』の概要』『日本語科学』, 15, 111-133.